

武道精神で社会を切り開く

第4回 武道精神でつながる他大学の仲間

株式会社千正組 代表取締役 千正 康裕

この連載の第2回で、慶應高校相撲部に入った僕が、大学相撲部の先輩方や社会人OBに囲まれて育ったことを書いた。年齢の壁を越えた人との付き合いを学ぶことができ、その後の社会人としてのスタートにも活かされた。今回は、相撲を通じて学校の枠を超えて一生の仲間ができたということについて話したい。何十年経っても、なお武道を通じたつながりは続いているが、彼らもまた、武道精神で社会を切り開く人たちなのだ。



墨絵：木村浩之

夏合宿での他大学生との出会い

慶應高校の相撲部に入り、慶應大学相撲部の部員、社会人のOBとの稽古に励んでいたことは前に述べた。夏休みに最初の夏合宿が訪れた。当時の慶應大学相撲部は、伊豆の大仁神社の土俵で毎年夏合宿をしていた。僕も、少々緊張しながら夏合宿に参加した。稽古相手は、みんな自分よりはるかに強い大学4年生ばかりだし、4泊だったから泊だったか、練習漬けの合宿というのも高校になって初めての経験だった。

この夏合宿には、立教大学相撲部も参加していた。当時は、よく慶應と立教が合同で合宿をしていたのだ。当時の立教大学は部員が少ない時期で、久しぶりに新入部員として入った坂田直明さん、松山陽司さんが参加されていた。2人は、自分より年上の大学生だけど、確かこの時初めて慶應との合同稽古に参加したように思う。自分より大きく歯が立たない先輩たちの中に、相

撲を始めたばかりの初心者として交ざるという意味では、僕と同じような立場だったと思う。

僕はというと、普段は実力の近い選手と稽古する機会がなかったので、坂田さんや松山さんとの稽古は、実力の近い選手との初めての稽古だった。そのことが嬉しかったし、とても楽しかった。

3人ともだいたい実力が上の慶應大学の4年生や社会人のOBに胸を出してもらい、厳しいぶつかり稽古などをこなしていた。その合宿を一緒に乗り越えたことが、今でも戦友のように思っている関係の始まりだ。

深まる立教相撲部との交流

合宿は朝から昼前までみっちり稽古をする。宿に帰ってちゃんこを食べると、午後から夜は自由時間だ。僕からすると坂田さんや松山さんは先輩であるが、合宿の参加者全体の中では初心者の下級生3人組のような感じで仲良きささせていただいた。食

事の後に、坂田さんが立教の応援歌を歌ってくれたのをよく覚えている。中学から慶應に通っていた僕からすると、初めての他校の仲間だった。

合宿も終わり東京に帰ってきてからも、立教相撲部との交流はますます盛んになった。特に、自分が入部した時の慶應大学相撲部は4年生ばかりだったので、先輩方が引退してからは、稽古相手を求めてよく立教に出稽古に行かせてもらった。坂田さんや松山さんが入った後、立教は部員が次々に増えたので、立教との合同稽古はいつも活気に満ち溢れていた。

僕自身も、自分の学校の先輩たちとの稽古とは少し雰囲気違って、ある程度自由を感じていたし、きつい稽古で息が切れている選手に対して、追い込むよりもみんなで声を出して盛り上げようという雰囲気。立教の土俵にはあった。そういう雰囲気が僕も好きだったように思う。稽古後にみんなでご飯を食べることもよくあったが、その時間もとても楽しかった。坂田さん、松山さん以外の部員たちも、皆フランクだった

し、優しい女子マネージャーの先輩たちもいた。そんな環境で育ったので、僕は慶應の相撲部出身だけど、立教の相撲部も第二のふるさとのように思っている。

武道精神で社会を切り開く 立教の相撲仲間

坂田さんは、大学卒業後に大企業に就職したが、後に独立して自分の会社を立ち上げた。「フレックススクッション」という、多くのスポーツクラブなどで導入されているフィットネス器具などを販売するサンテプラスという会社だ。フレックススクッションは、相撲の基本動作である股割りにヒントを得た器具で、股関節の柔軟性を高めることができるクッションだ。また、忙しいビジネスの傍ら、最近まで立教大学相撲部の監督もされていた。坂田さんの人生と相撲は切っても切れないのだ。

坂田さんは、大学の相撲部に入る前は高校で演劇部だった方だ。演劇部で鍛えた発声を活かしたのかどうかは分からないが、

坂田さんもNHKのアナウンサーとして活躍されていたが、何度か所属を変えながら、25年くらいアナウンサーとして活躍を続けている。現在も、フリーランスで活躍できているのは、きっと学生時代からの研究熱心な姿勢や、知的な雰囲気とは裏腹の、内に秘めた闘志があるからではないかと想像している。しかし、それだけではない。僕が独立起業した時のお披露日のパ

卒業後はNHKのアナウンサーになった。現在は、フリーのアナウンサーとして、大相撲中継や競馬中継の実況などで活躍中だ。長く上俵から離れている僕からすると信じられないが、40代後半になっても、競技としての相撲も続けている。坂田さんも筋金入りの相撲好きだ。

2人とも、学生時代にどっぷりはまった相撲がその後の社会人としての仕事や人生につながっている。僕自身は、2人のように相撲が直接仕事に結びついているわけではないが、相撲で培った精神や体力などが大いに仕事に活かされていると強く感じている。2人も僕も、長く社会のために働き続けられているのは、相撲に支えられているからというのは間違いないだろう。

キャラクターと 相撲の取り口と仕事

2人の学生時代を思い出すと、相撲の取り口とその人の性格には強い関係があることに気づく。坂田さんはガッツあふれる押

ティイには、一人でふらりと来てくれた。「なんか面白そうだから来たよ」と、少し照れた表情で言ってくれたのが忘れられない。一見、クールだけど人のつながりを大切にしてくれる温かさもある。

今なお続く交流

卒業後も、立教相撲部の方々とは、時々食事するなど交流を続けている。なぜか、立教OBの会合に1人だけ慶應出身の僕が参加していたこともある。坂田さんが、例のごとく学校など気にせず、「下止も来いよ」と気軽に誘ってくれたからなのだが、僕も坂田さんが言うならと、あまり気にせず参加させていただくことが多い。他の立教の皆さんも「おお、よく来たな。元気か!」といつも温かく迎えてくれる。だから、アウエーな雰囲気を含く感じたことがない。

昨年からだったか、アイデアマンの坂田さんが、コロナ禍で稽古ができない立教相撲部の学生たちと、オンラインで四股な

し相撲だ。前向きで明るいまっすぐな性格そのままの相撲っぷりだ。坂田さんは、センス溢れる業師で、目頃から思慮深く知性溢れる人柄だったが、それが相撲の研究熱心なところにも活かされていたように思う。

そのような学生時代の相撲の取り口や性格といったものが、現在の活躍にもつながっているように僕には見える。坂田さんはキャプテンや監督もされていたが、本当に明るく、人との敷居の低い方で、誰に対しても「一緒にやろうぜ」と気軽に声をかけて、みんなが楽しくいられる場をいつも作っている。坂田さんが入部した後、しばらく部員がほとんどいなかった立教大学相撲部に、次々と部員が増えたり、マネージャーが増えたり、相撲部が盛り上がったのも、その人柄によるところが大きいのだと思う。起業家として成功しているのも、おそらくいろんな人が集まってくる坂田さんの人柄と、山あり谷ありの企業経営の中でも前向きさを失わない明るさが背景にあるのではないかと感じている。

どのトレーニングをやり始めた。最初は立教の相撲部関係者だけだったが、坂田さんが例によっていろんな人たちを誘い、幅広い層の稽古会になったようだ。僕も坂田さんに呼ばれて、土曜の午前中に開かれる会に仲間入りした。坂田さんの友人の女性もいるし、映画制作や声優などのお仕事をされている方もいる。先日は、中学生も参加していた。四股を踏むという共通の目的で、所属組織も、性別も、仕事も、年齢もバラバラの人が毎週集まってくる。

学校など、所属や組織の枠を超えて、25年経っても今なお仲間であられるのも、学生時代に相撲を愛して、一緒に稽古に励んだからだろう。おそらく、武道に打ち込んできた読者の方々にも、同じように所属や組織を超えた仲間がいるのではないだろうか。もちろん、一生の友だちを作ろうという目的で相撲をやっていたわけではないが、結果的に武道という共通点が組織の枠を超えた仲間を育むというのは、現代社会における武道の素晴らしい価値の一つではないだろうか。



さし絵 園田美穂子

月刊 心技体 人を育てる総合誌

巻頭特別対談 高村正彦・井上康生
「終わりなき柔の道を歩み続けて」

新連載 歴史と未来のはざままで 新田一郎

巻頭 力 ラ ー	巻頭リレーエッセイ	坂東眞理子
	色紙に書く座右の銘	橋本敏明
	日本の名城	小和田泰経
	武士の精華 武具光耀	望月規史

好 評 連 載	武道を思索する	大石和欣
	私の修業時代	牧野 清
	充実した人生を送るために	菅野 純
	武士道の教えを武道指導に生かす〈最終回〉	太田文雄
	無我夢中—柔道に育てられて	柏崎克彦
載	武道精神で社会を切り開く	千正康裕

武道



美阿